



Contents

- ウィンタースポーツの世界と名寄市の可能性、そして、私たちにできること
～オリンピック、パラリンピアンが語るトップスポーツの現状と課題～
- 学長が語る 5年と半年間を振り返って—総括と展望—
- ようこそ研究室へ：研究室紹介・平成27年度科学研究費補助金獲得状況
- キャンパスライフ：サークル紹介「ピアサークル」・サークル活動報告
- NCU Information：入学式挙行・大学祭・国際シンポジウム



特集：大学祭シンポジウム

ウィンタースポーツの世界と名寄市の可能性 そして、私たちにできること ～オリンピック、パラリンピアンが語る トップスポーツの現状と課題～

パネリスト

加藤剛士 氏(名寄市長)

加藤 弘 氏(日本盲人会連合スポーツ協議会副会長兼事務局長)

逸見佳代 氏(全日本スキー連盟エアリアルコーチ)

永井順二 氏(陸上自衛隊第3普通科連隊)

コーディネーター

山本 浩 氏(法政大学スポーツ健康学部 教授)

今回の特集は、7月19日(日)大学祭企画として行われたシンポジウムの様子をお伝えします。雪の多い名寄でも盛んなウィンタースポーツ。オリンピック、パラリンピアンが、トップスポーツの現状を語りました。

(司会)

ウィンタースポーツの世界と名寄市の可能性、そして私たちにできることオリンピック・パラリンピアンが語るトップスポーツの現状と課題をテーマに第53回名寄市立大学シンポジウムを開催いたします。

パネリストに名寄市長の加藤剛士様、日本障害者クロスカントリー協会副会長の加藤弘様、全日本スキー連盟エアリアルコーチの逸見佳代様、名寄自衛隊第3普通科連隊所属の永井順二様、そしてコーディネーターに法政大学教授の山本浩様をお願いしております。

加藤剛士様は2010年に名寄市長に就任し、現在は名寄市長2期目を務められています。名寄市出身で小樽商科大学商学部管理科学科卒業後は有限会社KTパイオニア、株式会社名寄給食センター、株式会社グランドホテル藤花の代表取締役を務められた経験もお持ちです。

加藤弘様は、北海道旭川市出身で、先天性白内障により視覚障害がありながら学生時代より陸上とクロスカントリースキーを駆使、選手として活躍されています。特に北海道障害者スポーツ大会、全国障害者スポーツ大会ジャパンパラへ出場して入賞および優勝されています。また、社会活動として視覚障害者関係福祉団体の役員なども務められています。現在はあん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の国家資格を活かし、旭川市にて開業した治療院「ぎしん」でお仕事をされています。

逸見佳代様は、1993年リレハンメルオリンピックのエアリアルを見て感動したことからエアリアルを始め、世界選手権ワールドカップなどに出場し活躍されました。右膝靭帯損傷という大きなけがをされましたがそれを乗り越え、2006年ワールドカップ第5戦では自己ベストの8位に入賞し、トリノ代表入りを決められました。国際大会から引退された現在は、全日本スキー連盟エアリアルコーチ、北海道アスリートキャリア連携専門員、美深町スポーツ指導員を務められています。

永井順二様は、名寄市出身で名寄自衛隊第3普通科連隊に所属するバイアスロン選手です。2009年、2011年、2012年、2013年に日本代表として世界選手権に出場されました。また、2011年の冬季アジア大会では男子個人20 kmで金メダルを獲得されました。

山本浩様は、東京外国語大学ドイツ語学科卒業後、NHKに入局されスポーツ解説委員としてサッカー、アルペンスキー、野球、陸上競技、カーリングなど幅広く担当し活躍されました。リーグやサッカーワールドカップ、そしてオリンピックなどの実況経験もお持ちです。現在は法政大学スポーツ健康学部の教授を務められていて、著書も多くお持ちです。



(山本)

プロフェッショナルの3人とスポーツの世界ではなくてスポーツ全体をプロの目でこれから大きくしていこうという加藤市長とこの4人で話を進めていきたいと思います。まずはお三方それぞれの専門分野についてショートレポートをしていただくと思います。

(逸見)

フリースタイルスキーは、5種目あります。スノーボードの種目にもあるハーフパイプ。上村愛子さんがやっているモーグル。新しくオリンピック種目に入りましたスロープスタイルという種目と、スキークロスと最後エアリアルですね。エアリアルの見どころと言ったら大きなジャンプを飛ぶという所ですが、ジャンプ台を滑ってきてくるっと3回転します。この中にひねりを4回とか5回とか入れます。



ジャンプ台の高さは4メートルちょっとです。選手の技をただ見ているのは華麗でいいのですが、コーチという立場では選手のいろいろな部分を見る必要が出てきます。コーチは二カ所において、ジャンプ台のとなりと選手がスタートする地点にもコーチがいます。スタート地点のコーチは、選手がコントロールできるスピードの範囲を見えています。空中でコントロールできるスピードの範囲が狙っているスピードより1キロから2キロ以上速くなってしまうと、選手はうまく着地できなくなります。それよりもスピードが遅くなりすぎると空中で体を小さくしないと着地が出来なくなってしまうので、ジャンプの点数が落ちてしまいます。ジャンプ台の横にいるコーチは、ジャンプをみて、「ジャンプがこのままだとオーバーしすぎて背中から着地してしまいますよ」とか、「このままいくと回転が足りなくなるのでコントロールしないといけませんよ」などと声をかけています。選手は一人で演技をしますが、チームワークでジャンプを完成させるっていうのがエアリアルの一つの見どころになりますので、今度ぜひスタート地点やジャンプ台付近を見ながらエアリアルを見ていただけるとより楽しく観戦できるのではと思います。

(加藤)

名寄では、クロスカントリースキーが毎年健康の森コースで全日本クラスの大会等が行われていると思います。私も夏は陸上競技、冬はクロスカントリースキーをしています。クロスカントリースキーでは、今年2月に旭川で大会がありまして、クロスカントリース

キーの20キロロング、視覚障害の部、これは、障がい者パラリンピックの中で一番長い距離ですが、その時に3位のメダルをいただきました。今回出場した旭川の大会は、日本はもとよりアジアで初めて開催される大会で、第1回の記念すべき大会でメダルを取ったというのは自分でもよい経験になったと思っております。クロスカントリースキーは、みなさんに説明するまでもないですけども、雪原のマラソンと言われている競技です。また、障害者スキーの中でも、いろんなハンディを持った方、例えば聴覚障害、視覚障害、知的障害、脊髄損傷いわゆる車いすの方など全ての障害の方が出来るスポーツです。日本では残念ながら競技人口が少ないです。これから徐々に2020年の東京オリンピック・パラリンピック、さらに札幌での冬季オリンピック・パラリンピックを目指して準備や育成できればいいなと思っております。これはメダルと楯(たて)です。



障がい者の大会は、障がい者が支えるというコンセプトになっており、このメダルも美深高等養護学校の窯で焼いたメダルです。この楯も雨竜高等養護学校の方が作った楯です。あと印刷物やパンフレットも授産施設でプリントし、選手のお弁当も授産施設で作りました。今回行われた旭川の大会の最大のポイントは、「障がい者の大会は障がい者が支える」というコンセプトで行っていた点です。次に、こちらはGゼッケンです。



これは視覚障害者の方の前を走る伴走の方が「ガイド」ということで、これをつけて走ります。どのように伴走を行うのかというと、Gゼッケンをつけた方の腰にウエストポーチのようなもの、ガイドスピーカーと言いますが、これつけて、ここから声を発します。このスピーカーから、「右右左左前後ろ」と言う方向や、あとは「森があるよ」とか「こういう建物があるよ」など、声によって指示をします。このくらいの声であれば大体ガイドと選手の間は5メートルから10メートル離れていても十分に聞こえます。この音によって私たちはガイドと一緒に二人三脚で走るということです。今回のワールドカップ旭川の競技は、このような形で行われました。現在、クロスカントリースキーの障がい者スキーも、広く全国で選手を発掘している段階です。

(市長)

加藤さんは、視覚に障害を持ってらっしゃいますが、競技や練習をやるにあたって、健常者とは違うご苦労とかあれば教えてください。また、健常者と違う研ぎ澄まされた能力があれば教えてください。



(加藤)

障がい者スポーツは、いまは健常者、障がい者という垣根を越えて一つのスポーツということで取り組んでおります。やはり、どんなスポーツでも、生活するにしても目からの情報はすごく大事です。しかし、私は視覚にハンディがあり、その目の情報が少ないので、どこか他の情報を活用していく必要があります。要するに残存機能を十分にフルに活用するのです。視覚障がい者の場合は特に聴覚、音が大切です。次に五感です。たとえば風の体へのあたり方によってここはあまり障害物がないとか、ここの前に誰かがいるとかを感じます。触覚も大切ですし、嗅覚、においもそうですね。私は若干目が見えますけれども、まったく目の見えない方は、当然視覚からの情報がゼロになります。そういう方は聴覚がすごくすぐれています。よく絶対音感といいます。そういう方は音を聞いてすぐピアノを弾けます。それと同じで感覚で、聞くということによって、肌で風を感じるということによって、そういうようなものを競技の中でフルに活用して、競技に挑んでいます。

(永井)

バイアスロンというのは、ライフル射撃とクロスカントリースキーを合わせた競技です。バイアスロンのバイは、二つのという意味がありまして、二つの種目を合わせたものがバイアスロンです。クロスカントリースキーは馴染みがあるとは思いますが、今日は道具を持参してきましたのでお見せします。まず、スキーですね。スキーとストック。このストックには強度があって、軽いカーボン繊維で作られています。このスキーもそういう風にできております。



みなさん、バイアスロンには、あともう一つ、ライフルがあります。この銃を使用して、的が5つあり、それを打ち抜くように射撃をします。競技の流れとしては、10キロスプリント競技では、まずのまで3.3キロ走ります。次に伏せ撃ち、伏せて打つ射撃をします。これで5つ

的を撃ち抜きますが、的を一発外すごとに150メートル走をプラスされます。5個全部外したりすると750メートル走ることになります。もう取り返しがつきません。非常に疲れますし時間も加算されます。そのため絶対には外せないというのがこの射撃です。また、射撃が終わったらすぐに再び3.3キロ走ります。次に立射、立ち打ちをします。同じように繰り返して全部打ち抜いてペナルティをもらわないように射撃をします。最後に3.3キロを最後の力を振り絞って走ってゴールを目指します。50メートル先の立射ですと直径が約11センチ前後で、伏せ打ちですと、さらに小さくなり、50メートル離れたところの4センチになります。実際50メートル先の4センチの的なので結構難しい射撃になります。立ち打ちも、安定しない中で11センチの的を狙うので、非常に難しい射撃になります。これを風や時には猛吹雪中で競い合いながら射撃をします。バイアスロンは、そういう厳しい状況下で早くより正確に撃ちぬいてペナルティを出さずにゴールを目指して一番タイムの早かった選手が優勝するという競技です。バイアスロンは、非常にスリリングな競技ですので、見たことがない方はyoutubeなどの映像をみていただければ非常に理解を深められるのではないかなと思います。

(山本)

いろんな意味で視覚の情報が少ないということは、体の情報つまり足もとの雪の状態なんかは健常者に比べてすごく高いレベルで把握されているのですか。

(加藤)

そうですね。先ほども言いましたけど、フルに五感を使って情報を得ています。特にスキーは、永井選手も感じていると思いますが、滑走面です。滑走面によって、一歩踏みだしてみると、「これは滑るな」と感じます。自分の体調によりますけど、その五感、特に足の裏の感覚でこれは滑るな、滑らないなと感じています。自分の体調もあるし、スキーのメカニックの部分もありますが、それもいろいろ加味して最終的に自分の判断で競技に挑むということで、視覚がない場合はそれ以外を活かして競技に挑むということは大切かなと思いますね。

(山本)

永井さんはスキーでクロスカントリーの部分がありますが、いま加藤さんが言われるような雪面の状態は体の部分と目の部分の両方で感じていますか？それとも足からの感覚が重要ですか？

(永井)

雪面に関しては足の感覚は重要ですけど、もちろん目で雪質の状況というのは確認できますので目で感じる部分もあります。

(山本)

ということはその目での情報を得られない加藤さんはかなり感じているレベルが違うということですか。

(永井)

山の中を滑走しますので、もちろん上りもありますし下りもあります。カーブもありますし、起伏に富んでいますから、目から得られる情報がないと非常に厳しい戦いになるのではないかなと思います。

(山本)

一方で逸見さんに伺いますが、我々は車の運転をしていて、「あれこれ下りだよな」と思ったら上っていたなみたいなこともありますよね。目の情報が実は違う情報を送っていることもあるような気がするのですが。

(逸見)

そうですね、実際に風の音もエアリアルでスピードを感じるために必要です。目の情報は、雪が降っているとか、降っていないとかを感じています。それだけでは、ちょっと感覚がちがうことがあるので、それプラス耳などを使いながら判断しています。目だけの判断はしていないですね。

(山本)

加藤さんは、自分の持っている能力の全体を健常者に比べると1.5倍くらい高めて持っているのではないかなといわれていますが。

(加藤)

そうですね。やはり欠損した部分を聴覚、または触覚で補う、そのどうしても補えない部分をガイドさん、伴走の方からその情報を得る。それが重要です。クロスカントリーはどうしても個人競技という感じがありませんが、先ほども逸見選手も永井選手もいましたけども、個人よりはやはりチームでの競技かなと思います。

(山本)

今度はお三方にお聞きしますが、実際の戦いの場面とは違った部分でのご自身の世界観、それを紹介して頂こうと思います。まず逸見さんから。

(逸見)

小さい時から10年くらい体操をしていました。とにかくずっと体操でオリンピック選手になりたい気持ちがありました。でも、体操をやっているときに、「このままではオリンピック行けないな」ってあるとき気がつきました。体操でけがをしてしまったし、自分のクラブのなかにも自分よりたくさん上手な選手がいて、大きな大会に行っても優勝することはなかったの、オリンピックに行けないのに体操を続けていていいのかなと、そして、体操がおもしろくないなと思いました。その時にリレハンメルオリンピックのエアリアルを見て、これならオリンピック行けるなと思いました。その時、自分の新しい夢を見て、オリンピックというものを自分がすごく大事にしていると気が付いて、中学3年生の時に体操からエアリアルの世界に飛び込みました。体操の時には水は飲むなご飯は食べるなといわれていましたが、今度ご飯を食べなさい、トレーニングしなさいという感じでした。体操の時のトレーニングは、砂袋背負って

階段を上られるみたいな感じでしたが、エアリアルでは、マスクをつけて科学的に自分の酸素の摂取量を測定したり、そのようなデータを蓄積していることにすぐカルチャーショックを受けましたね。それで1998年長野オリンピックの代表に選ばれて、2002年のソルトレイクオリンピックの代表に選ばれましたが、98年長野オリンピックの前に右膝の靭帯を切るケガをしました。でも、最初のオリンピックはあまり出場できると思っていなかったもので、そのときは、そんなに大きなショックもなく、次のオリンピックに出場できればいいかなという感じでした。次の2002年のソルトレイクオリンピックの時も代表に選ばれましたが、また靭帯を切り、2回もオリンピック直前でけがをすることになりました。2002年は大学を卒業するタイミングだったので、卒業したら引退してどこかで働こう思っていました。冬季スポーツは、お金もかかるので、オリンピックに出て、大学4年生の区切りでやめようかなと。でも、やっぱりオリンピックに出たいなという気持ち、もう少し競技を続けたいなという気持ちがあった時に、両親があと4年応援するよと一言言ってくれたので、それであと4年頑張ろうと思いました。2006年の時が26歳でした。調子が一番よかったのが2002年ぐらいの時でしたね。ワールドカップでも決勝に残るようになっていました。2006年の時になったら競技のレベルも長野オリンピックの時よりもだいぶ上がってきて、結果は、たいして良くありませんでした。ただ、4年間4年間という区切りをつけてやってきて、自分が目標にしていたところに到達できたということが嬉しかったです。



今は、美深町でエアリアルの指導をしています。また、北海道でもタレントアスリートというジュニアを育成するような事業がスタートしたのですが、その事業にも関わっています。選手をしているときは、こういうスポーツの世界に関わる仕事をしていこうとか全然思っていなかった。大学時代もただスポーツを一生懸命やって大学に入ったのですが、そんなに一生懸命勉強したかという、正直たいして勉強しなかったかなと思います。その時の学科が行政学科という学科で、今は、行政の中でスポーツに携わる仕事をしているので、こういう仕事に就きたいと思っていたわけではないですけれども、大学の時にやったことと一生懸命スポーツをしてきたことが今全部結びついているかなという感じです。

(市長)

今あらためて伺いますと、いろんな苦勞をされてきたことを改めて感じますし、オリンピックに出たいという目標を最後まであきらめず続けてきたということが結果に繋がって、そしてまた今もこうして子どもたちをさらに育成できるという、今までの経験を生かした仕事に繋がっているのだなと思いました。目標をしっかり持ってそれに向かって邁進してきたということが、今の逸見さんの人生になっていたのかなと。しっかり目標を持って前に進んでいくということがすごく大事なことだと今あらためて聞いていて感じましたね。

(山本)

永井さん、いま逸見さんの場合はオリンピックって言われましたが、バイアスロンですと毎年世界選手権もありますよね。オリンピックの年には世界選手権はないはずですが、1年ごとの世界選手権とこのオリンピックの4年のスパンっていうのと自分の目標設定ではどういう違いがあるのですか？

(永井)

目標設定としては、自分の場合は、最初に大きな達成したいという目標を設定します。一番大きな目標をオリンピックと設定して、ではオリンピックに出るためにはどうしなければいけないのかというのを考えて、途中途中で中期目標を設定します。例えば、世界選手権には出なければいけない、日本代表には選ばなければいけない。では、その日本代表になるためにはどういう練習をして、どれくらいのタイムで競技をしなければいけないというように細かく区切って大きな目標を達成するように心がけてやっていました。

(加藤)

自分がハンディを持つということで、健常者と違うということは自分の体のメンテナンスがすごく大事です。無理をすると逆に自分の体を壊してしまう。例えば車いすマラソンや車いすバスケットもしくはシットスキーなんかもそうですが、褥瘡いわゆる床ずれを起こす場合があります。そういう場合は、自分の体も考えながらかつ競技の休息休養も大事ですし、当然その中でどのように自分の目標設定、先ほど永井選手もおっしゃっていたように長期目標から中期目標と短期的なスパンで半年とか3か月というようなトレーニングをします。また、その中で休養も大事かなと思っております。

また、お二人とも世界で戦っておられますが、私もヨーロッパや北米の方に遠征に行って1週間とか2週間、時には1か月合宿などを行います。日本の環境で戦うのと世界を舞台にアウェイで戦うのとは環境が違います。当然、時差もありますし風土も違います。この大学にも栄養学科ってありますか？環境の違う中で、栄養は私たちスポーツ選手には大事ですね。日本人というのは、お米、炭水化物、お味噌汁、梅干しなど日本独特の風習の中で育った中で作られた肉体でできています。では、向こうに行ったらそういうのがあるのかということ決してそうではない。けれどもそれがない

と戦えないというのは、それは通用しないので、アウェイに行けばアウェイの食生活に慣れるというのも大事だろうと思います。でも、パラリンピックのチームでは、炊飯器を持って行って実際お米を炊いてということもありました。おにぎりパーティ、お寿司パーティをして気分転換しておりました。

障害者スポーツというのはすごくシビアなもので、結局私がスポーツをするにはどなたかがいなければできない、ガイドさん伴走の方がいなければならない。となるとその方の費用はどうなるか。今では、国が2020年のパラリンピックを目指してどんどん支援が伸びています。私たちの時代は、選手がガイドさんの交通費を負担する遠征費も負担するという時代でした。仮にヨーロッパへ30万かかる×2で60万負担するという時私も何度かありました。それが大変になり結局選手生活を断念するという選手もいると聞いています。すごく残念なことだなと思いますが、それが現実だと思います。そのようなことは、主に視覚障がい者が該当しているかと思います。私は自営で、鍼灸マッサージの仕事をしています。そうすると、自分の仕事とアスリートを両立することが必要で、それはすごく難しいことです。自分が遠征したら当然収入は無しという状況になります。すごくシビアな面もありますが、クリアしていかなければならないと思って苦勞しながら現在に至っています。国内大会でも後輩の育成も含めて考えています。生活と競技を両立するスタイルで、私は、冬はクロスカントリースキー夏はマラソンを取り組んできています。

(山本)

永井さんの場合は、試合と試合の合間が短いため、いろんな種目に出ざるを得ないということもありませんよね。

(永井)

ワールドカップに遠征しますと、1週間スパンでどんどん試合が来まして、1大会で多い人であれば3レースでなければいけない。それが3週間3戦続いて、それでまた次のクールに入るとまた3週間、また次のクールに入ると3週間というようになっていて、年間では非常に厳しいレースが数十レース続いています。

(山本)

ということは休養のプロ。休むのはものすごくまいでしょ？

(永井)

スポーツ自体が疲労のたまる、疲労をためるようなスポーツですので、疲労を抜くというのが非常に重要な要素になっていて、もちろん栄養管理もそうですし、またトレーナーの方のマッサージ、自分でセルフマッサージなど、練習の中でもクールダウン、これらを重要視して疲労を取り除くようにやっています。

(山本)

一般の人が、疲れた時に早く疲労を取る良い方法をお持ちじゃないですか？

(永井)

何かをしたら疲れがとれるという風に皆さん思うと思うのですが、寝ることが一番いいと思う方いますか？そうですね、寝ることですね。睡眠時間を取ることは非常に重要です。それ以外に、ただ寝ているだけでは体が固まって血流なども悪くなって、肩こりなどの原因にもなりますので、軽い運動が大切ですね。血流を良くするための軽い運動です。またストレッチ等を自分の生活に取り入れていただくと毎日疲れなくて元気に生活できるのではと思います。

(市長)

今、加藤さんの話を聞いていて切実だなと思ったのは、冬季スポーツはお金がかかるという点です。逸見さんもされていましたが、さらに障害のある方のスポーツとなると伴走者とか、いろんなスタッフもいてそういうところに多額の負担がかかって、なかなか競技を続けたくても続けられないということは非常に切実だなと思いました。スポーツ全般そうですが、人気のあるスポーツはスポンサリングが集まり、良いトレーニング環境が整うことなどに繋がると思います。そういう意味では特にパラリンピックのスポーツは、まだまだ理解がされていないところがあって、こういうところは我々がしっかりと普及拡大をしていかなければならないのかなと思います。名寄市立大学には、スペシャルオリンピックス、知的障害のスポーツ大会の支援サークルがありまして、あちらの方に檜山さんご夫妻が座っていらっしゃいますけども、スペシャルオリンピックスの日本の代表理事をやっているらしいので、大学生がスペシャルオリンピックスの選手たちをサポートしに行くというボランティア活動もしてまして、今日学生さんいるのかなと思いますけれども素晴らしい取り組みをされてきて、こうしたことを広げていくことでさらに障害者の方のスポーツ全般が明るくなればなと思っています。

(山本)

永井さん。いまスタッフの方の話が出ましたので永井さんの方から話をお願いします。

(永井)

バイアスロンは、自分一人で走っているの、個人種目だというように思われがちなのですが、自分は競技を本格的にやるようになってチームスポーツだということを痛感させられました。まず選手である自分があります、それにコーチがつかます。もちろんスキーのコーチもいますし、射撃のコーチもいます。道具を使うスポーツですので、スキーをより滑らせるためにワックスマンが約2名ついてます。また、疲労を抜くためにトレーナーがついてます。自分が遠征行くために、その遠征先の施設確保をする人たちもいます。自分がワールドカップを回ることに対して身近な人でこれくらい人数のチームを組んで実際に走っているということです。スペシャリストの集団が選手を走らせるために動いてくれて、それで勝負を決めるということで、選手だけの力では決まらないというのがスキースポーツなの

ではないかと痛感しております。身近なところでこれだけの人に関わって、さらには町を挙げて支援をしてくれて、例えば、自分の練習場所についても名寄市は健康の森とかを提供してくれます。そういうところがなければ僕らは練習もできません。そのように考えると関わってくれる人がほんとにいっぱいいますね。



道具は、日本で普通に買うとクロスカントリーのトップスキーは8万円から10万円位します。それを10台くらい遠征に抱えていかなければなりません。10台は、単純計算でいうと100万円ですよ、100万円。ポールも一本5万とか、さらには靴とかウェアとか、何でもとんでもない費用がどんどん加算されていきます。こういうのをメーカーの方々をお願いして安くしていただいたり、ご厚意でいただいたりとかそういうことをやって僕らが競技を続けられる現状になっております。ですから、本当にここではもう書ききれないほどの人たちにお世話になって僕らは競技を続けて、僕は成績を出すというような流れになっています。だから自分ひとりで行っているわけではないので、僕もそういう部分ではがんばれます。自分一人だと自分が好きな時に苦しかったらやめればいいのですが、支えてくれている人たちがいっぱいいますので、自分も背中を押されて頑張って、今も続けていられるのかなと痛感しております。自分は、周りの人に助けられて今の生活があると思いますのでこういう人のつながりを大事にしていきたいと思っております。

(加藤)

今、永井選手も言いましたが、私たちも同じです。本当にいろんな方がいて、栄養の方、合同分析の方、コーディネーター、ワックスマン、たくさんの方がいます。さらに自分の健康管理ですね、とにかく自分がスタートラインに立つまでにいろんな方の協力を得て、それが支えとなっていて、スタート後もタイムを取り、コースの脇に立って「後何秒だ」、「目標とするターゲット選手は何秒だ」って声をからしてコーチの人やスタッフの方が支持してくれる。本当にチームスポーツですね。

(山本)

そういう意味では逸見さん、遊びでスキーをやるあるいは遊びでスケートをやる、一人で子どもの頃やっているとときにはそういうスタッフは特にいるわけでもなくて、全く感じないところですね。

(逸見)

そうですね。スキー場に行けばリフトが動いていますからね。スキー場の方は、スキー場の整備はしてくださっていますけれども、スキーは、自由に滑って帰ってくるって一人ですることができるようなスポーツですね。でも、どんどんトップスポーツに続いていくと関わってくる人たちが増えてくることを実感しますね。私たちもたくさんの人たちが必要ですし、いろいろな人がスポーツに関わることで、その人の住む町が活性化し、町がよくなっていくこともあると思います。スポーツが盛り上がるは、選手だけではなくてそこに暮らす人たちにとってもすごくメリッとしたことなんじゃないかなと思います。

(山本)

スペインに人間の塔っていうのがありますね。大人がたくさんこの肩の上に人を乗せ人を乗せ、そして一番上には小さな子供が乗って高みに手が届くようになるわけですが、今話を聞いていますと、多くのスタッフが下で支えているがゆえに一人の人間が非常に高いレベルのスポーツパフォーマンスを成しうるといことですね。でも、その上だけに光を当てていると下を見損なってしまう現実もある。我々は多くの人たちがそこに目を向けなければいけない時代に突入している状態だと言えますね。そういった時に必要となってくるのが行政ですね。一人の社会あるいは会社あるいは家族や学校だけではできない部分があるわけです。そうしたところに目をつけておられるのが市長の加藤さんということですが、名寄市の考え方あるいは加藤さんご自身の考え方でスポーツとこれからの行政の仕組みというものをお話しいただいてよろしいでしょうか。



(市長)

あらためて皆さんのお話を聞いていて感銘を受けるのは、スポーツをするということは、心と体を鍛えているとよく言われますが、それだけではなくて、スポーツに携わることは社会との関わりにも繋がっていくのだということを改めて感じました。今、心のバランスを崩す方がいらしたりだとか、いろいろなことがあるわけですが、スポーツに何らかの形で携わるということが子供のころからだけではなく社会人になってからも非常に大事なことでないかなと改めて今感じているわけです。

名寄市は、11月から雪が降って、3月くらいまでずっと積もっていて、日本全体でみると特異な気象状況です。でも、この雪が翌年の水田を潤して日本一のもち米を作り、土を強くして寒暖の差の中で見事な野菜を作っていく。一方、雪があることは、除雪などのハンディキャップを抱えているということです。しかし、この

雪を生かすことでもっといろいろなことができるのではないかということで、名寄市では早くから冬季スポーツに盛んに取り組んできた経過があります。ジャンプ台があります。スキー場も素晴らしいスキー場があります。クロスカントリーコースもFIS公認のコースになっています。バイアスロンは、今ちょっとなかなか難しいということですがけれども射撃等も打てる環境を整備すればということになります。最近ではカーリングの施設もできました。これが全部、半径10キロ以内に集約されているということになります。名寄市周辺の町には美深町のエアリアルであるとか下川町のジャンプ、士別市朝日町にもジャンプ台があります。そうした冬の拠点となる施設がこの周辺に凝縮されている。これは全国的にみてもおそらくこの名寄だけなのではないかと思いません。長野県も白馬だとか軽井沢とかに意外と分散しています。ここまで施設を集約して、冬季スポーツの拠点を持っているのは名寄地区以外にないのではないかなと思っています。2018平昌オリンピックがあります。各国は直接平昌には行かず、どこかで合宿をしていくと思います。その時に必ず選ばれるのが北海道だろうというお話を聞いています。札幌もそうですが、おそらく名寄が拠点として注目されるのではないかとされています。加えて、2026年には札幌冬季オリンピック。さらには2017年に冬季アジア札幌大会も行われる予定になっています。世界的に見ても冬季スポーツの開催できる場所が限られてきている現状があり、この間のソチオリンピックを見ても全然雪降ってないですからね。平昌にしても雪が少ないという状況もあります。世界の中でもこれだけ雪が降って都市環境をしっかり保っている国、地域は日本を除くとあと2、3地域くらいしかないと言われて聞いています。という意味で、日本、北海道は世界の中でウィンタースポーツに期待されていて、その中でも名寄は、この特異的な環境を発揮できるのではないかなと思っています。この地域を今後さらにウィンタースポーツの拠点として発展させていくこと、それが我々の心身ともに健全な育成に繋がってくるし、町の活性化にも繋がってあらゆる効果を発現できるのではないかなと思っています。ぜひこれは皆さんと一緒に考えて前に進めていきたいと考えているところです。

(山本)

お三方にはですねウィンタースポーツ特にこの北海道の道北の特性を大事にしながらウィンタースポーツをどうしていったらいいのか、どうすべきなのか一言ずつ締めめの言葉を。

(永井)

競技人口を何とかして増やしていかなければいけないのではないかと思います。競技人口が増えれば、それに参加する人も増えますし、見る人も、応援する人も増えますので、日本で言えば野球などのメジャーなスポーツのように好循環をどんどん生んでいくのではないかなと思います。そういう好循環をこの名寄市を中心に発生していければ非常に良いのではないかなと思います。



(加藤)

僕が思うのは、競技人口もそうですけど、やはり街がスポーツに目を向けてくれないといけないと思います。スポーツで街を活性化すること、私は、旭川市から来ましたけど旭川市もウィンタースポーツには力を入れている街です。クロスカントリースキーアルペンなどのできる拠点もあります。クロスカントリースキーは、私たち障がい者スキー大会も毎年やりますし、トップアスリートの出場する大会から、これからスキーをやるような方の大会もやっています。やはり街を挙げて市民の声を反映しながら大会を盛り上げる。そうなれば、行政と民間が一緒になることで街が潤う。当然今回の旭川の大会もそうですけど、海外の選手が来ると旭川で飲食代、宿泊代と消費をする。やはり大会などを誘致することによって活性化する、街が潤うということです。でも、市民がその大会に何の競技があるということを知らないとまず盛り上がりませんね。街、市民がスポーツを知る、こういうスポーツがあることを、そして名寄でこういう大会があるから是非来てくださいということを知ることが大切だと思います。選手に水を一杯あげるだけ、そういうボランティアまたはスタッフとして何らかの形で、どんな形でもいいから関わってもら。それが障がい者スポーツ、スポーツを盛り上げる一つの要因かなと僕は感じます。

(逸見)

日本のスポーツは、どんどん強くなっています。その要因として、東京にナショナルスポーツトレーニングセンターがあり、そこは夏の競技についてはいろいろなトレーニングができるようになっているので、強化に繋がっていると思います。それに対して、冬季は1か所でトレーニングができる場所というのがなかなかありません。冬になれば、選手は遠征に行き、海外でトレーニングをして、そのままワールドカップを転戦していくということで、なかなか身近で選手がトレーニングをしている姿とか、選手たちが頑張っているという姿を人々に見ていただくことができないという環境があります。名寄市は、ジャンプ台、クロスカントリー場があったり、これからバイアスロンの整備をしたり、隣町にエアリアル台があったり、そういうこともいろいろ考えていってほしいと思います。アスリートがトレーニングをして、その姿をいろんな人が目にするというのも考えた町作りもまた一つ大切なことではないかなと思います。

(市長)

2月にハンディキャップスキーの大会があります。大

学生のみなさんにも、ぜひこの大会に参画をしていただいでですね。目が不自由な方とか耳が聞こえない方がどのようにレースをするのかということは、非常に興味深いものがあるので参加をしていただき、また健康者の方も参加できるスポーツの種目もあるので、ぜひ参加していただきたいと思います。また来年の2月には全国中学校ノルディックスキー大会が行われます。再来年からはJOCのジュニアオリンピック大会が開かれます。このノルディック大会は、来年度からは5年間くらい継続で名寄開催になっていまして、冬季スポーツのジュニアのアスリートたちが、名寄に集まってくる環境が整っています。しかし、運営するボランティアスタッフが全体的に不足をしております、ぜひこうした大会運営にも皆さんで参画をしていただいで、この地域を盛り上げて、またこの地域からアスリート発掘をしていくことができればと思います。そのことが、この地域のこれからにつながっていくのかなと思います。冬季スポーツの拠点化を目指して一生懸命頑張りたいと思うのでみなさまのお力添えをぜひよろしくお願い致します。



(山本)

冬のスポーツには、たくさんのお金がかかる、たくさんの方が必要である。そして時間もかかりますよね。さらにエネルギーも必要です。もともと雪や氷というのは我々の社会の中では邪魔者だったはずですが、厄介な存在だった。その中に出て行って自分の力を仲間とともに発揮する。このウィンタースポーツのありようというのは今の社会の中で大変に大きな価値を持つものだと思いますね。その大きな価値を持って世界の中で戦っていく上では、たくさんの方が一つに束になっていかないとおそらく勝ち抜けない時代だろうと思います。ウィンタースポーツというものはエネルギー効率の悪い部門だと思いますね。夏のスポーツであれば、やったことを発揮するときにあまり大きな障害がない。ところが冬のスポーツはそうではなくて道具の制約あるいは自然の制約いろんなものが妨げにかかってきます。それを乗り越えるためにはどうしても人の輪そして社会の結束が必要です。行政、学校、会社、そして仲間、家族そういったものが一つに束になる。こういうことの重要性について皆さんから皆さんの仲間に対して強いメッセージを送っていただきたいと思います。今日は1時間30分にわたってご清聴誠にありがとうございました。



学長が語る

「5年と半年間を振り返って—総括と展望—」

名寄市立大学学長
青木 紀

はじめに

9月の中旬、北海道国公立学長懇談会が札幌市立大学であった。いま、話題の「地方創生と大学の役割」といったテーマが中心で発言を求められていた。その場で、「自分なりにやることはやってきた」と言った。そんななか、残り半年余りを前に、本学の広報Web委員会から「総括と展望」についてまとめてくれという依頼が来た。「もうやめるのに」とも思ったりもした。それに、自分なりにしても丁寧に総括するには、あらためてすべての文書等の確認が必要だし、何よりもそういうことは他者がやることではないかとも思った。したがって以下は、いま現在の、私個人の簡単な感想めいたものとなる。しかし、こういうことを広報Web委員会や組合サイドからも依頼されるということは、学長としての責任の重さもあらためてかみしめている。

1 民主的運営とマネジメントあるいはガバナンス

初めにこのことについて触れるのは、いささか型ぐるしい気もするが、この5年間と何か月の取り組みの出発点でもあることから、少し話しておきたい。学長のような管理責任を負うポジションは、あくまで「依頼されて」なるものというのが私の考え方でもあり、就任に当たって何か特別に改革構想があったわけではない。そもそも本学の実情はまったく知らなかった(知る由もなかった)。が、私の公平・平等・正義といっただれに教えられるでもなく身に付けてきた心情(信条ほど強いものではない)と乏しいとはいえもっていた管理職と社会学者としての経験は、本学の教授会の運営の仕方から人事のありようまで、また設置者側との関係、とくに大学財政に関してはほとんど何も「知らされていない」現状など、まずそこらに本学の当面の課題があることに気づかせた。

とくに運営に関しては、短期大学部の教授会における扱い(赴任前は短期大学教授会、全学協議会、保健福祉学部教授会という順序の議事進行のあり方だった)に、「どうして」こんなことが許容されているのかと、私の心情を刺激した。これが取り組みの文字通りの始まりだった。運営協議会の廃止、全学一本の人事選考委員会から投票制による人事選考委員会へ、教授会だけでなく教授会懇談会も含めた全員参加の運営、各種委員会の年間総括と方向性をめぐる臨時教授会における報告の義務付け、期限付きの特別委員会委員における学長指名による教員の学科利害にとらわれない運営参画と組織活性化への期待など、できる限りの手は打ってきた。またことあるごとに、教授会における個々の教員の責任も強調してきたところだ。

さらに徹底させたいと思って取り組んできたことは、情報の共有である。これは、これだけ大学を取り巻く情勢変化が速く激しいなか、流れを見極めながら、とるべき方向を誤ることなく、よくも悪くも「大学間競争」でサバイバルしていくための、そして全員が運営に責任をもつための、最大の条件だと考えていたからである。その点は自負できることだと思っている。しかし、具体的に期限を切って大学に求められてくる課題(典型的にはCOCなど)や無条件に「上から」求められてくるガバナンス改革への対応は、少なからぬ教員にも不満は残した。それは、運営上の問題とも言えるが、同時に、情報を流すだけでは、なかなか埋まらない意識水準の差をどう埋めるかという学科レベル、個々人のレベルまで降りたところでの課題とリンクしている難しい問題だ。いまでも模索している。



2 新図書館棟の建設と児童の4大化=社会保育学科の設置

この二つの課題への取り組みはそれぞれ違うことでもあるが、同時に、ほとんど同じ時期に、強く意識したことでもある。違うという意味は、児童の4大化は保健福祉学部の立ち上げに残された課題としてあった。それを全学的課題として前面に立ちあがらせていくためには、言うまでもなく学内合意を形成しなければならない。しかし、新図書館の建設は(学内合意ではなく)、設置者側の意識の問題(取り組む姿勢、文化ホールの建設も含んだ、何もしなければ後回しにされていくという状況)としてあると判断したことだ。同じという意味は、就任した年(2010)の11月3日(文化の日)に「名寄市立大学の未来」として市民公開討論会を組織化したときに始まった、ということである。

これら二つの課題を推し進めていくに当たっては、まずそれまでの4大化をめぐる動きを事務局に残されている文書などから解釈し、自分なりに判断しながら、学内だけでなく、大学外にもつねに情報発信と問題提起をしていくことがとくに重要だと考えた。すなわち、学内には、情報の共有と大学に相応しい互いに説得性を競いあうなかでの合意形成、学外には、それに基づいて、市民、議員、そして設置者に対して問題提起(主張)をしていく方法の大事さといったことである。法人化もされていない大学の長として、遠回りのようだが、それが目標をやり遂げていく最短の道でもあったと判断した。そこには、一般論としてだが、たえず主導権を取りながら主張していくことがない限り、どこでも組織(役所)は容易には動かないという認識があった。

そして市民公開討論会は、当選したばかりの夢の語れる市長、名寄市の二大財産の一つである市立総合病院の院長、そしてもう一つの財産である本学の学長、それをまとめる大先輩前田憲先生という組み合わせで行われた。そこで思わず出てきたフレーズが「図書館のない大学なんて」である。この図書館など本学の建物整備に関する思いは、学長を引き受けて以降、各地の県立大学あたりで学長会議が開催されるたびに感じざるを得なかった(率直な表現で言うのだが)「めげそうになった」感覚の反動でもあった。そこには、学生や教職員の思いを背負ったわが身もあった。そしていま、工事が始まった。これを機に、質の高い図書館が生まれていくことを切に願うところだ。



児童の4大化に関しては、新図書館構想と異なって、もともと市の総合計画に載せられていなかったこと、後期計画が始まって「白紙の状況」だった現実、しかもすでに児童学科以外は4大化してしまっているという難しい状況などを念頭に置く必要があった。そこでは、新設する場合の新学科の内容、それがいかに学部全体の強化につながっていくか、さらに名寄市の発展にどう寄与するかということまで展望したデッサンを描くことが必要だった。そして、それを学内的にはもちろん、学外的にもわかりやすく説得していく有効な方法が求められた。

学内だけの努力でことが進めば楽なことだが、人口3万人、財政力指数0.3にも満たない弱小自治体が設置する大学が何か(お金のかかる課題)を主導するには、それだけの説得性ある議論を大学内外にできるかぎり浸透させることが不可欠である。偶然の幸運だが、北都新聞の30回連載の「ピヤシリの麓から」はその任務を背負ったものとなった。まだホツスすぎるこの時期、詳細は避けるが、昨年のある段階までは、本当に社会保育学科の設置ができるかどうかは「わからない」状況にあった。「見えない」壁は厚かった。

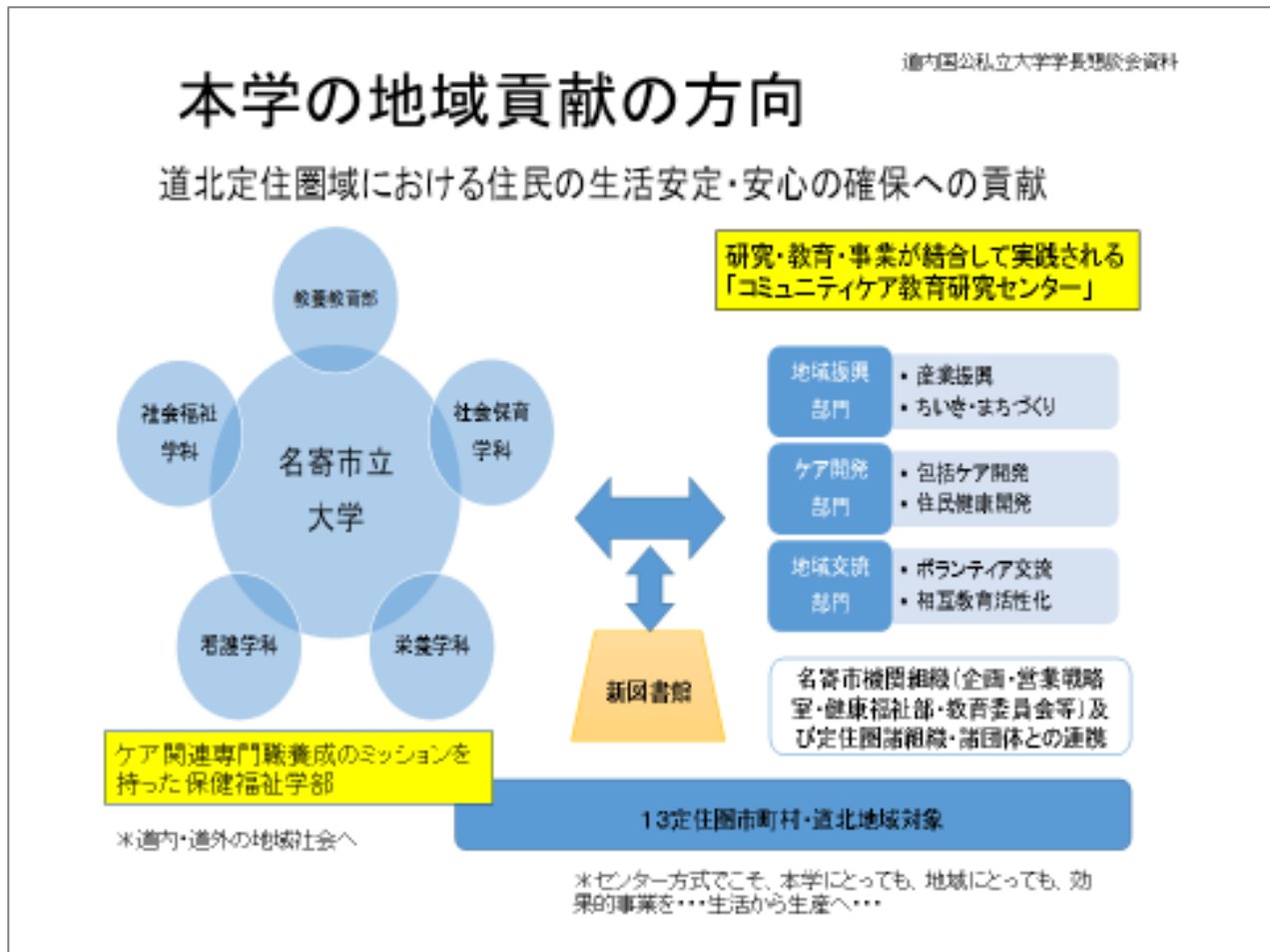
始
ま
る。
。

名寄市立大学
保健福祉学部
社会保育学科
2016年4月開設

3 学部再編強化とコミュニティケア教育研究センターの設立に向けて

児童学科の4大化=社会保育学科の設置で意識したのは、なお一般に保育士養成は短大卒でOKという社会的評価をどう崩しながら、いかに4大化の積極的意味付けを主張していくか、ということだった。この点で、私自身のそれまでの(子どもの)貧困研究の蓄積と専攻分野を教育福祉論として名乗っていた経験は、大きな役割を果たしてくれた。それが個人レベルであれ、子どもの未来、ひいては日本の未来をきりひらくという、一つの確信に繋がらせたからである。大義としての社会保育学科設立の根拠を支えるものとなった。やはり大義は大事だ。人を奮い立たせるからだ。しかし、その後の教員確保はなかなかの仕事だった。かくして、(総合的な)専門職養成大学として、学科間を通じた連携と切磋琢磨が対等にできる、バランスのとれた組織が構築できる可能性が増すことを通じて、学部全体の再編強化になるという理屈が現実になろうとしている。

そんな模索の積み重ねのなかで、4学科ともに何らかのケアにかかわる専門職養成をするという意味合いから、またケアの倫理は、これまでの市場中心型の社会とは異なった、生活視点からのサステナブルな社会の構築可能性を内包することから(注)、そして、このような動きを教養教育部からも支え、あるいは(理想的には)リードしてくれれば、という願いから、「ケアの未来をひらく名寄市立大学」というキャッチコピーが生まれた。もちろん、この説明には後付けの意味合いも含んだものと理解していただいてもいい。しかし、これで論理的にも説明がしやすく、文部科学省が大学のミッションの再定義を言う前に、本学の方向性はよりはっきり、(もちろんパーフェクトだとは思っていないが)すっきりしたものとなった。そのあたりの構図は、これまで教授会でも縷々話してきたところである。ここに掲載した図は、はじめに触れた北海道学長懇談会に提出したものである。



その後の「言いだしっぺ」(「ケアの未来をひらく名寄市立大学」としての責任から取り組み始めたケア論(哲学・倫理学や教育学などから看護学までを含む)、あるいは栄養、看護、社会福祉、保育の専門領域の「専門性」に関する勉強は、学長になったときから放棄したはずの研究の面白さを再び目覚めさせた。やみくもに関連文献を読みだしたからと言って、いくつかの専門分野をまたいで何かをまとめるなど無謀なことであり、一人で広くて深い森の中に入り込むことは避けるべきだとも思っている。しかし、迷って出られなくなる可能性と恐怖感に襲われながらも、それぞれの専門職の「専門性」あるいは専門領域の学問的確立といったことが、なお見えていないのがケア関連専門職領域の現実であることも自分なりにわかってきた。それゆえ実のところ、これまでしばしば、各学科それぞれが何をめざすかといった「問いかけ」をしてきたが、その回答も容易なことではないとも感じている。が、また同時に、そうであるがゆえに、本学がそれらの議論に割って入ることができれば、という思いもある。

それはまた、学長職務の二期目に強調したこと、すなわち、それぞれの学科の「教育の質保証」あるいは「教員の質保証」の課題、これらを裏付けていく具体的作業に関わったことでもあるのではないかとはいまは考えている。とはいえ、これほど難しい課題もないということも承知している。何よりも大学の教員の質の向上は、基本的には個人の努力によるからだ。だが、と言って、方向性を示さず、曖昧にしておけばいいというものでもない。そうだとすると、いま求められるのは、「ケアの未来をひらく名寄市立大学」にふさわしい、それに応え得る教育と研究のありようの学科レベルの追求と、もう一つはコミュニティケア教育研究センターという場での、新たな研究あるいは教育の組織化であり、それらを個々の教員のカも発揮しやすい条件確保の手段としても具体化していくことだ。ある意味、その結果として地方貢献ができれば十分だ。

前者についてさらに言えば、つね日頃からの教員間の自主的な研究交流が基礎となるが、学科内でのそれを意識的に組織化する役割をもった教員も必要だと思われる。研究推進(世話)係とも言うべき存在だ。しかしそれは、だれでもというわけではなく、職位に関係なく、研究の喜びや苦しみを現に味わっている教員や専門職実践を研究成果として表現することに格闘している教員、あるいはそれらの経験を意欲的に若手などに伝えたいという教員でなければならないと思う。後者については、現場や学外と学内とを結びつける専従職員あるいは教員の配置が前提だが、地域のニーズ、とくにケアのニーズに応えながら、自分たち自身の研究力を高めていく、あるいは教育方法を革新していく展望を描けるリーダーが必要だ。もしそれらの成果として、たとえば道北のような厳しい、広大な地域を対象に、新たな地域包括ケアモデル(名寄モデル)のようなものが構築できれば、それは文字通り地域から「ケアの未来をひらく」ことになるだろう。また地元就職も増えるかもしれない。そんな夢も持ちたいものだ。あえて言えば、「へき地」だからこそ、われわれは集団としての夢も追いかけるべきだ。

そう考えてくると、FDにしてもなんにしても、中央からだれかを呼んで話を聞くスタイルから、そろそろ内部で切磋琢磨して成果を生み出し、そこに喜びとやりがいを感じる場の形成への転換が本学には求められている。本学はその段階を目指すことができるようになってきている。意識的にそれを生み出す、互いの大学教員としての厳しさが求められている局面に入ってきていると思う。本学の社会的評価の高まりは、そのこと抜きにはあり得ない。その点で注目したいのは、あるいは展望も感じているのは、何らかの賞を獲得する事例や科研費の獲得やさまざまな類の出版の増加、あるいは復命書にしばしば書かれているケアへの関心の高まりや新たな教育方法の追求の動きなどだ。また、社会保育概念の構築に向けた児童学科の努力にも期待したいところだ。新しい芽は確実に生まれてきていると思う。

なお、保健福祉学部とコミュニティケア教育研究センターの関係について、あらためて付け加えれば、われわれはすでにこんな「大学の目的」をもっていることを思い出すのもいいかもしれない。すなわち「1. 名寄市立大学は、高度な知識と技術および高い倫理性を有し、保健・医療・福祉の連携と協働支えうる専門職を育成する。2. 名寄市立大学は、地域が抱える種々の課題について研究し、それらを解決することによって新しい未来をひらく」という、二つの文言である。そして、もう一つ思い出してもいいのは、われわれの禄の出元であり、新図書館棟などの建築に伴う借金負担の問題である。

今後とも学部の専門職養成教育の革新が根幹に据えられ、たくましく、融通が利き、責任意識のある専門職を養成し、地域社会に供給していくことが本学の最大の任務であることは明白だ。そのことは、ホームページでの学長あいさつ、卒業式や入学式告辞などでも繰り返し強調してきたところだ。しかし結局、実質的に問われてくるのは、学生たちに見せるわれわれ教員一人ひとりのモデルとしての背中だ。いわゆる反面教師の学びを別として言えば、われわれ一人ひとりが、どれだけ熱意と省察をもって教育に取り組んでいるか、どれだけ研究者としてそれぞれの専門領域で格闘しているか、どれだけ地域社会を舞台に 응용問題を解くことに努力し、地域課題に応えようとしているか、その姿勢のようなものだ。あるいはそういった大学全体の雰囲気である。

4 学長という経験から—おわりに代えて—

学長を引き受けたときは、今度は学者としてではなく、“実践家”であろうとは思ったことは覚えている。かつて社会福祉史の研究者で吉田久一という大先輩がいたが、彼は生まれ変わることができたら研究者でなくソーシャルワーカーでありたいとどこかに書いていた。そのことも頭をかすめていた。本学が養成している専門職の実践とは同じだとはもちろん思わないが、昔から実践という言葉には何かしらの後ろめたさを感じ、そして少なからぬ関心を抱いてきた。おそらく育った時代背景の影響なのだろう。

そんな経験も踏まえて言えば、学長としての姿勢でもっとも大事なものは、はじめに触れたように、やはり情報の共有と民主主義的運営だと思う。そして、教職員一人ひとりへ近づく努力だ。しかし、本学のような財政力もない小さな自治体が設置する、しかも地理的には圧倒的なハンディを背負っている環境は、それだけではすまない学長の資質を求めている。それは、当面の交渉相手と対等に渡り合うだけの準備と能力、学内合意に基づく主張が通らないときの辞職の覚悟であり、それを裏付けるだけの学問あるいは何らかの専門職としての実績とプライドであり、つねに大学だけでなく、名寄市の将来をも見通すだけの幅広いものの見方ができる能力だ。そしてさらに、入試広報委員が頑張ってくれているように、自らのパフォーマンスも本学の社会的評価を高めることに積極的に位置づけ、これを効果的に実践していける勇気のようなものだ。86人の学長からなる全国公立大学学長会議では、いつもそのことを意識していた、せざるを得なかった。

2015年10月2日

ようこそ研究室へ！！

名寄市立大学の研究最前線を紹介します。

21世紀の学校運動部活動の在り方に関する探求

保健福祉学部 教養教育部

准教授
関 朋昭



研究の背景

日本の部活動は特異である。日本人にとって馴染みの深い部活動であるが、運動部、文化部に限らず、世界的にみても面白いシステムで行われている。筆者も、中学、高校、大学と、このシステムの中で過ごしてきたが、違和感だらけであった。顧問からの理不尽な指導、先輩からの執拗な嫌がらせなど枚挙に暇がない。中根千枝氏のタテ社会ではないが、日本的な独特な慣習、風習が色濃くシステム形づくっている。高度成長期においては、この奇異なシステムが機能していたように思えるが、知識基盤社会（ドラッカーがいう知識社会と同じ）では、このシステムも通用しなくなっている。なぜならば、与えられた知（情報）だけでは社会（世界）で通用せず、新しい知（創造）こそが生きる社会（未来）を司っているからである。

このような意味において、21世紀の知識基盤社会における部活動との役割とは何か、を探求することが本申請研究の背景である。

研究の概要

日本における学校と社会の関係性を把握するため、学習指導要領の系譜と社会の変容を俯瞰的に史観しながら、部活動の歴史的な役割と機能を再整理した。すでに筆者の先行研究では、体育教師のエートスに着目しながら、部活動の課題を明らかにしている。しかし、この研究には、同時にいくつかの課題もある。1つは、20世紀と21世紀の体育教師像が同じで良いのかどうか論じられていないこと、2つめは部活動と社会との関係性が論じられていないこと、3つめは、部活動を考察する上での新たな視座の提出に留まり、これからの部活動の在り方が論じられていないこと、であった。

これらの三つの指摘を分析することによって、20世紀の部活動の役割や機能を再整理することが今年度の研究目的であった。これまでの研究姿勢は、どちらかと言うと部活動を社会から独立した存在と捉

え、とりわけ産業社会との関連性を考慮した論考が少ないことは否めなかった。すなわち、部活動が主体であり、学校が客体と成り、社会までを守備範囲とする視点が不足していたといえる。そこで本申請研究は、社会から学校を俯瞰し、部活動までを見通す視点を計画し、研究を進めることにした。

20世紀の社会といってもそれを一括りににはできるものではないため、いくつかの断片に展開し分析する必要があった。その手掛かりとして、「学習指導要領」、「学徒（生徒）の対外試合について」などをもとに、戦後を「5つの時代」に区分した。第1の時代（1946年～1960年）、第2の時代（1961年～1978年）、第3の時代（1979年～2000年）、第4の時代（2001年～2010年）、第5の時代（2011年以降）である。

「5つの時代」において、部活動と社会がどのように関係し、またどのように部活動が展開され運営（マネジメント）が成されてきたのか、進化論的な立場から考察し明らかにした。

今後の展望

当初の計画通りに研究を進める。本年度は3年目であるため、これまでの分析と考察より知識基盤社会が求める部活動の更なる探求を行うことが究極的なねらいとなる。

具体的には、研究協力校へ出向き、フィールドワークを通じた部活動と教科教育外の課外活動の取り組みについて検討する予定である。

尚、これまでの本申請研究の成果を拙著にてまとめ刊行した。



単行本：159ページ
出版社：ナカニシヤ出版（2015/06）
ISBN-10：4779509432
ISBN-13：978-4779509438
¥：2,160



2015年5月22-23日に台湾（台北）で行われた国際会議（2015 NTSU International Coaching Science Conference）での、Poster Presentationの報告の様子。

平成27年度 科学研究費補助金 獲得一覧（関准教授と江連助教獲得分を除く）

小野寺理佳(社会福祉学科:教授):離婚・再婚家庭への世代間支援:「多世代の紐帯」としての祖父母に関する実証的研究(基盤研究(C))

吉中季子(社会福祉学科:准教授):単身女性のライフステージにおける貧困の形成要因に関する研究(基盤研究(C))

長谷川武史(社会福祉学科:講師):セーフコミュニティ機能の応用方法に関する研究(若手研究(B))

松岡是伸(社会福祉学科:講師):生活困窮対策におけるスティグマの実態に関する調査研究(若手研究(B))

近代日本における更生保護思想史研究

保健福祉学部 社会福祉学科

助教
江連 崇



研究の概要

私の研究は近代日本において更生保護思想がどのようなものだったのか、またどのように変遷していったのかを明らかにするものです。更生保護に関わった役人、知識人、実践家などの論考から戦前の更生保護思想について総体的に整理、検討し更生保護における枠組み再検討への基盤的研究としての提供を目指しています。

研究の背景

今日の日本における刑法犯の認知件数は戦後を通してまだ高い水準にあり、また再犯率は減少傾向にあるとは言えず、刑事政策分野においても大きな課題となっています。また2012年には日本において初となる更生保護に特化した学会である更生保護学会が設立されるなどその関心は高まっています。特に刑務所と福祉施設が連携できるような具体的な更生保護の枠組みが必要といわれております。しかし今日の更生保護の枠組みを検討する際に必要不可欠である更生保護の歴史が総体的に整理、分析されていない現状があります。

現在の研究状況

現在は主に明治大正期に多くの監獄関係者の論考が記載されていた雑誌や新聞などを用いて当時の更生保護思想を検討しています。そこには現在の更生保護の枠組みを検討する上でも参考になる点が多々あります。

たとえば現在取り扱っている「大日本監獄協会」という会の雑誌には会の設立趣旨文が掲載されています。そこには「一 監獄事業を奨励する事 一 不良少年感化事業を奨励する事 一 出獄人保護事業を奨励する事 一 貧民の救助及び教育に関する事業を奨励する事 一 監獄学の進歩を奨励する事」と記されています。「監獄協会」とは称していますが、監獄の周辺領域である教育や出獄人支援、貧困防止なども事業の一環としているのです。

当時の多くの監獄関係者は地域にでたあとの出獄人の支援は監獄事業の一環だと考えており、監獄（刑務所）と出獄人保護会（福祉施設）の連携についてすでに議論されて実践されていたのです。

もちろん当時と同じように現代社会において実践できることはありませんし、批判的に捉えるべき思想もすくなくありません。しかし当時の思想をみるにより今日の更生保護を考える上での示唆をあたえてくれるのではないのでしょうか。



・『監獄協会雑誌』 第4号 1899（明治32）年

これからの研究

今後も雑誌、新聞、手記などから監獄関係者の言説分析をおこなっていきます。また戦後も含めた民衆レベルでの監獄観であったり犯罪観も分析していきたいと思っています。特に北海道には多くの集治監がありましたので当時の歴史がどのように伝承されているのかなどフィールドワークも含め調査していきたいと考えています。



・不定期で自主ゼミを開催。写真は街歩きをしてインタビューする学生の様子。

●関連する科学研究費補助金
平成26-28年度 若手研究 (B) 「近代日本における更生保護思想史研究」

三井登(児童学科:准教授):戦時下における小学校児童の結核病、寄生虫病、眼病対策(基盤研究(C))

瀬戸口裕二(社会福祉学科:教授):小学校入学初期における教科学習を支える認知促進プログラムの開発と検証(基盤研究(C))

清水池義治(教養教育部:准教授):地理的表示制度における生産者組織を通じた地域空間ブランド・エクイティの向上(若手研究(B))

田邊宏基(栄養学科:講師):CD8陽性T細胞を介した大腸発酵水素の抗炎症作用の解明(若手研究(B))

キャンパスライフ

サークル紹介 ピアサークル

ピアカウンセリングの資格を取って、高校にいこう！！



名寄市立大学ピアサークル
部長 矢野 知里
(カウンセリング中)
北海道旭川南高等学校出身
看護学科3年

皆さんこんにちは！名寄市立大ピアサークルです。平成21年から本格的に活動を開始しています。主な活動内容は、学習会、思春期ピアカウンセリング養成講座初級の資格の取得をした上での高校訪問です。

今年は、北海道名寄産業高等学校、北海道下川商業高等学校、北海道剣淵高等学校、北海道士別東高等学校、北海道美深高等学校で行う予定です。以前には、北海道遠別高等学校、北海道留萌高等学校など訪問させていただきました。

ピア(仲間)意識を大切にして、「高校生と共に性=生について考えよう」という活動は、高校生と大学生のエネルギーが混じり合って、上から目線の教育からお互いに支え合う教育という形になってきています。

平成21年9月には名寄市教育委員会から名寄市模範青少年表彰を受け、現在は約20名が所属しており、週に1回の集まりと高校訪問前には、何度も原稿を読み返し、高校生の反応を考えながら、わかりやすく説明する技術を磨いています。他に、エイズデー(12/1)では、レッドリボンを作成し、図書フェアを開催したり、イオンで模擬授業やパネル展を行い、啓蒙活動に努めてきました。

高校生の前で、授業は苦手という人は、イラストを描いたり、グループワークに参加するなど、参加の仕方は様々です。メンバーは社会福祉学科、看護学科、栄養学科、以前は児童学科の方も参加していました。学科や学年の枠を超えて、人間としてのあり方を考える機会になったり、なんと言っても高校生からのパワーをもらって、自分達が忘れていた初々しさから自らを省みることもできます。

先輩の寸劇やマイクなしでも通る声、対応力を感じて、時には、実習や生活の仕方に及ぶ助言がもらえたりで、学ぶことが一杯です。



今年の1年生の作品を載せました。表現力が素晴らしいでしょう！根拠ある確かな情報を責任を持って伝えて行く活動。これは、自己決定力に繋がる大事な活動です。是非、一緒に活動しましょう！！



思春期ピアカウンセリングの様子

<柔道サークル>

- ・第48回北部北海道柔道大会(6月7日)
社会福祉学科1年 春田彩夏 個人戦一般女子の部 優勝

<名寄市立大学吹奏楽団>

- ・第54回名寄地区吹奏楽コンクール(8月2日)
大学C編成の部 金賞・全道代表
- ・第60回北海道吹奏楽コンクール(8月29日)
大学C編成の部 銀賞

<スポーツチャンバラ>

- ・第3回北海道・東北合同学生大会(6月28日)
団体戦 準優勝
栄養3年 野中紀鷹:有段長剣フリー、二刀、楯小太刀、基本動作の部 優勝
栄養3年 金澤雄大:新人小太刀の部 準優勝
栄養2年 小笠原広奈:女子小太刀の部 優勝、女子長剣フリーの部 準優勝
社会福祉1年 松村拓実:新人長剣フリーの部 優勝
栄養1年 武藤俊:新人長剣フリーの部 準優勝
社会福祉1年 鈴木洸夢:新人二刀の部 優勝
社会福祉1年 高橋真奈:女子小太刀の部、女子長剣フリーの部 敢闘賞
社会福祉1年 渡辺栞奈:短刀の部 準優勝
栄養1年中島明穂:短刀の部 敢闘賞
- ・第41回全日本選手権大会(8月30日)
栄養学科3年 野中紀鷹:小太刀 二段の部 準優勝

<ダンスサークルくるくる>

- ・「Updraft」ダンスイベント(7月12日)
チーム名:Up to you (木下瑞恵、佐藤空)コンテツ2on2バトル 準優勝

<SOサークル>

- ・第3回有森裕子なよろひまわりリレーラン(8月9日)
(タイムレース 一般女子の部 1位)

<北鼓童サークル>

- ・第23回YOSAKOIソーラン祭り(6月4日～8日)

<野球サークル>

- ・第62回北海道地区大学体育大会(7月11日～13日)

<女子バレーボール>

- ・第48回大滝杯北海道大学男・女バレーボール春季大会(4月24日～26日)
- ・第62回北海道地区大学体育大会(7月18日～19日)



名寄市立大学吹奏楽団



柔道サークル



ダンスサークル くるくる



スポーツチャンバラサークル

NCU Information

入学式(4月6日)

2015年度「名寄市立大学・短期大学部入学式」が挙行されました。新入生204名(保健福祉学部152名、短期大学部52名)が大学生活をスタートさせました。



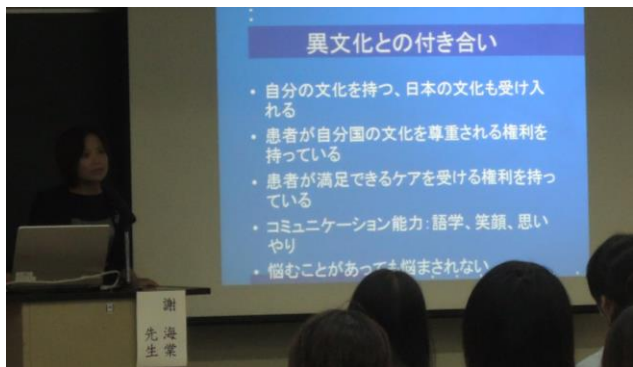
ピブリオバトル in 名大祭(7月18日)

ピブリオバトルとは、本の面白さをプレゼンテーションして競うあう知的書評合戦のこと。本学では昨年に引き続きの2回目。今年度は6月30日から7月13日まで学科学年の垣根を越えた予戦を4回行い、5人の本戦バトルを決定。大学祭の本戦では、たくさんの観客に見守られながら、熱いバトルを繰り広げました。



国際シンポジウム(8月8日)

『ケアの実践現場における中医学の応用』のテーマの基、国際シンポジウムを開催しました。「国際的な医療に関心を高め、特に中医学分野における友好と協力及び日中の医療の向上と相互理解を促進すること」を目的に、袁世華先生、謝海棠先生の両名をお迎えし、漢方医学の魅力と中医外部療法、異文化看護からみる日本のグローバル化の看護について講演を頂きました。



編集後記

大学祭シンポジウムでは、ウィンタースポーツの世界と名寄市の可能性をオリンピック・パラリンピアンが名寄市長と共に語り合いました。北海道の短い夏も終わり、冷たい秋風が吹き始めています。大学周辺も少しずつ冬支度が始まろうとしています。そんな中、新図書館の建設工事が行われています。長い冬が終わり次号の広報誌をお送りする頃には社会保育学科がスタートしていることでしょう。これからもWeb広報誌を通して、青木学長が語った地域と歩む名寄市立大学の活動をお伝えしていきたいと思ひます。

名寄市立大学広報Web委員会 傳馬淳一郎

<広報Web委員会>

結城佳子
村上正和
忍正人
山本達朗
MEADOWS Martin
傳馬淳一郎